

55 日本における法定伝染病統計の分析

一九〇〇—一九六〇(一)

鈴木晃仁

この研究報告は、二〇〇二年度から慶應義塾大学で行われている、近代日本の家族、人口、経済、環境、そして疾病の歴史を包括的に捉えるための新しいコンセプトのデータベース、歴象オーサリング・ツール、CRONOS(クロノス)の疾病研究分野からの第一報である。

歴史学の立場から見たときに、疾病の歴史を研究することには二つの側面がある。リヴィーラーとしての側面と、イニシエーターとしての側面である。まず、ある時代の社会においてどのような疾病が多かったかを知ることと、その社会の特徴を知ることができる。十九世紀から二十世紀における疾病構造の転換は、工業化と都市化に伴う生活環境の変化、所得水準や栄養の摂取状態、公衆衛生の整備や医療技術の水準、個人の衛生習慣などの

ファクターの変化の絡み合いの中で分析されてきた。疾病は、ある社会の姿を明らかにする指標であり、その指標の変化は、社会の変化を私たちに示してくれる。これが、歴史研究における「リヴィーラー」としての疾病の意味である。第二に、疾病やそれに対する反応は、社会の構造を作りかえてきた。中世ヨーロッパのペストのように、疾病のインパクトそのものが劇的な社会変化をもたらした例もあれば、近代の感染症への公権力の対応が、個人の身体の周りに構築されるバイオパワーをじわじわと広げていったようなパターンもあるだろう。このような、疾病が新しい社会構造を作る契機となった事情を、疾病の「イニシエーター」としての側面と呼ぶことができる。こういった疾病の二つの側面を研究し、疾病の歴史を、社会が疾病構造に及ぼした影響と、疾病が社会構造に及ぼした影響の二つの方向を確定して、疾病の歴史を歴史学の中に定位することが、クロノスを用いた疾病研究のひとつの大きな狙いである。

こういった立場から日本の疾病の歴史を研究するとき、「法定伝染病」の歴史が、歴史学にとって最も有益

なものの一つである。平山勉による同じタイトルの報告(4)が詳細に論じるが、『衛生局年報』、『府県統計書』、ペストや赤痢などの地域的な流行の際に作成された報告書などが、さまざまなデータを提供してくれるからである。また、患者の数と死者の数の双方がわかることを利用して、マキーン以来の歴史学上の論争の焦点になっている近代の死亡率の低下に、臨床的な医学、栄養状態、あるいは公衆衛生がどの程度貢献したのか、という古典的な問題を日本の文脈で問い直すことが可能になるからである。

特にこの報告が強調したいのは、日本全体で見たときには見えてこない地域(府県)ごとの差であり、また一括りに感染症とまとめてしまったときには見落としがちな、八種(一九一八年から十種)の法定伝染病の中の大きな違いである。例えば、予備的な調査によれば、大都市部と地方部では、伝染病の発生状況は大きく異なり、特に大正期以降、東京、大阪においては幾つかの伝染病の発生は上昇しているのに対し、地方部では一定、あるいは低下が見られることもある。あるいは、地方の

府県といっても、青森県と大分県をとって見ると、両者における伝染病の発生は大きく異なった姿を示す。こうした、時間軸と空間軸の上でデータを分析することができるクロノスの特性を活かして、一九〇〇年以降の日本における感染症の制圧と疾病構造転換の地域的、時間的な概略の姿を確定し、そこから導き出される仮説を提示することが本報告の目標である。

(慶応義塾大学経済学部)